

横浜市インフルエンザ流行情報 18号

横浜市健康福祉局健康安全課 / 横浜市衛生研究所

《トピックス》

インフルエンザ患者報告数が減少しています。

【概況】

2020年第6週(2月3日～2月9日)の定点^{※1}あたりの患者報告数は、横浜市全体で**7.62**でした。前週の11.97^{※2}から減少し、流行注意報解除基準である10.00を下回りました。

年齢別では、10歳未満の報告が全体の56.1%、15歳未満の報告が全体の80.2%を占めています。学級閉鎖等は、第6週にて小学校を中心に35件、患者数436人が報告されており、前週と比較して減少しています。

今シーズンの第6週の市内の迅速診断キットの結果は、**A型58.8%、B型41.2%**となり、これまで報告数が少なかったB型が半数近くを占めています。

流行注意報が解除された後も、インフルエンザの流行自体の継続が予想されるため、引き続き、咳エチケット、正しい手洗い^{※3※4※5}等による予防や、早期受診などの対策^{※6}が重要です。

また、保育園・幼稚園や高齢者施設等での集団発生の防止のため、各施設での持ち込み防止や感染拡大防止対策を引き続き徹底しましょう。

※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内153か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

※2 追加報告があったため、以前お知らせした情報から報告数が更新されています。

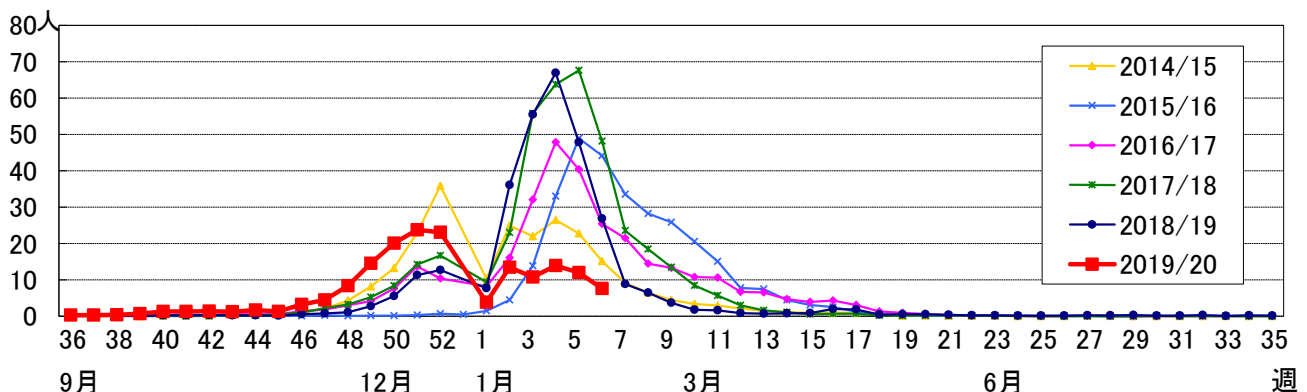
※3「冬の感染症対策」チラシ(横浜市保健所)

※4「正しい手洗い方法とは」(横浜市保健所)

※5 横浜市保健所ホームページ(「正しい手洗い方法」および、掲示用ポスター「石けんで『手』を洗おう」をトップページに掲載しておりますので、是非ご利用ください)

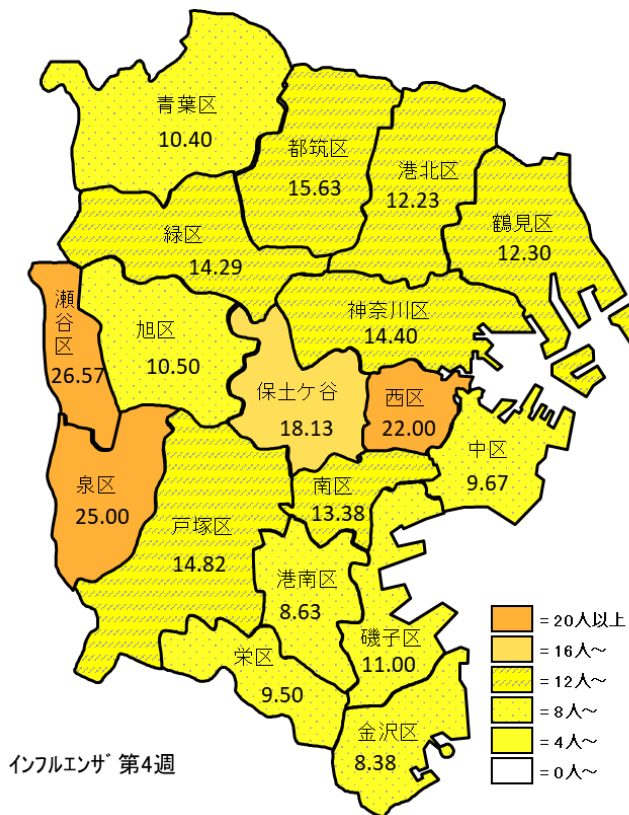
※6 市民向けインフルエンザ予防チラシ(横浜市保健所)

1 市内流行状況:市全体の定点あたりの患者報告数は、第49週にて定点あたり14.51となり、流行注意報の発令基準(10.00)を超えました。第51週で23.78に増加しましたが、第4週で13.92^{※2}、第5週で11.97^{※2}と横ばいで推移し、第6週で7.62となり、注意報解除基準(10.00)を下回りました(今シーズンは流行警報は発令されていません)。なお、昨シーズンの流行警報解除は、第7週(2019年2月11日～17日)でした。

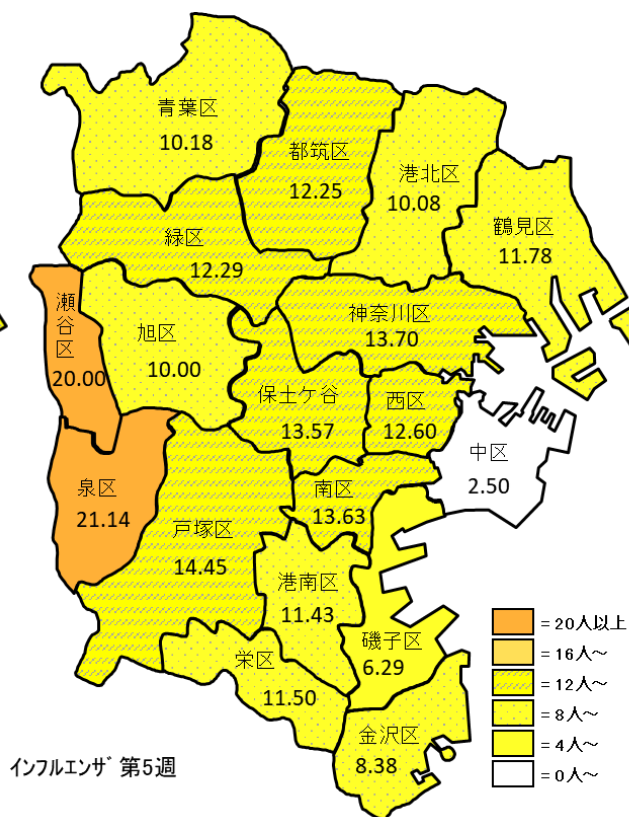


2 地図で表した直近3週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)

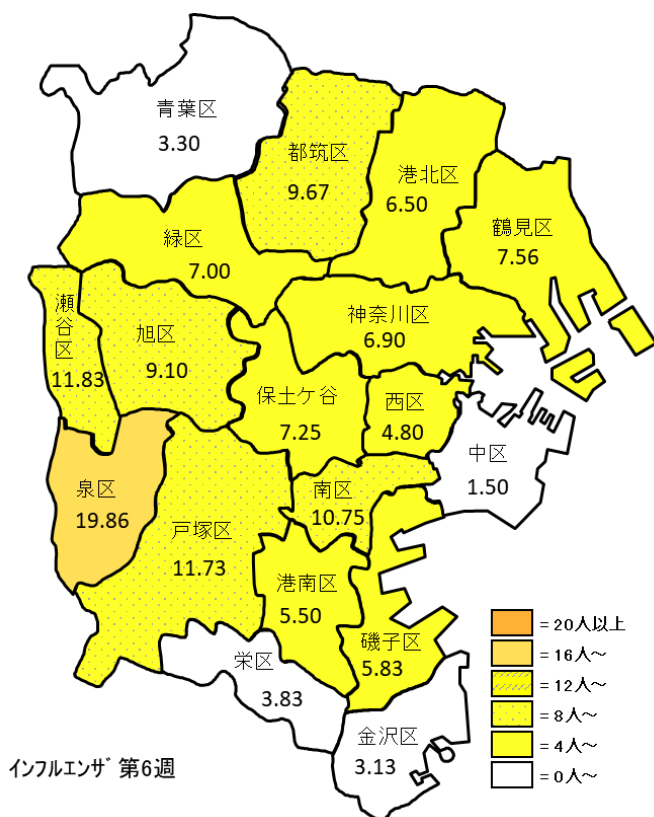
《市全体》
第4週 13.92^{※2}



《市全体》
第5週 11.97^{※2}



《市全体》
第6週 7.62



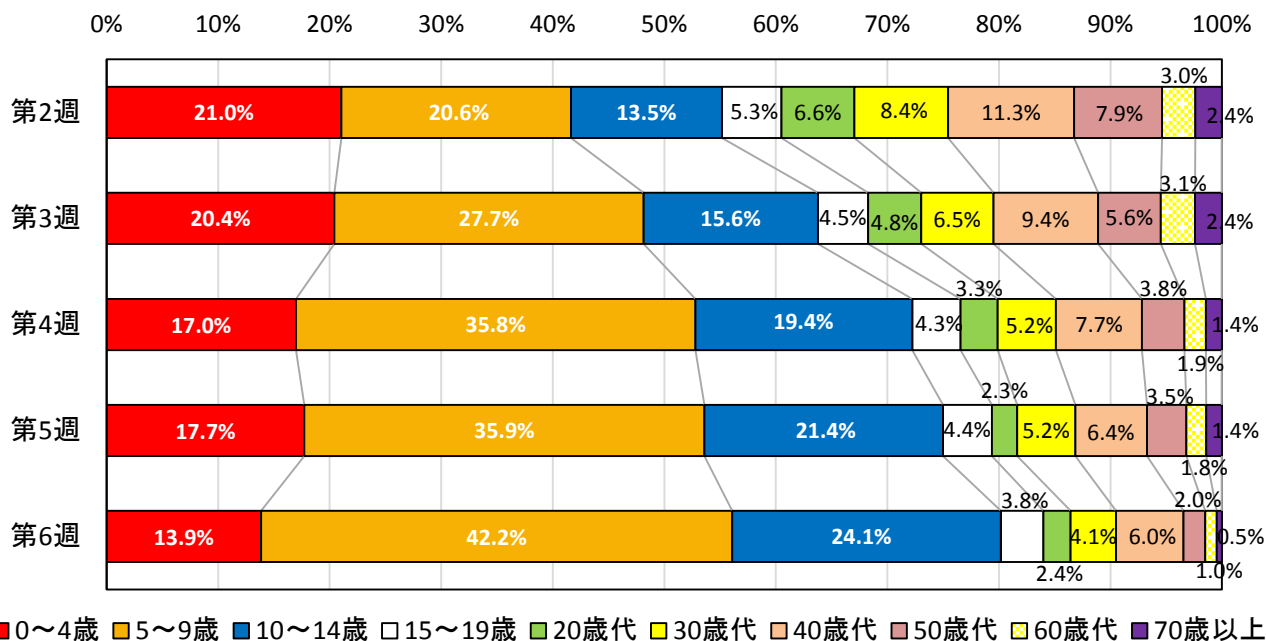
《参考》

昨シーズン(2018/19年)の流行推移

- ・流行の開始【定点あたり1.00超】
第48週(11月26日~12月2日)
- ・流行注意報発令【定点あたり10.00超】
第51週(12月17日~23日)
- ・流行警報発令【定点あたり30.00超】
第2週(1月7日~13日)
- ・流行警報解除【定点あたり10.00未満】
第7週(2月11日~17日)

3 年齢層別集計:第6週の患者年齢構成は、5歳未満が13.9%、5歳から10歳未満が42.2%、10歳から15歳未満が24.1%となっており、15歳未満が全体の80.2%を占めています。5歳から15歳未満の占める割合が増加傾向となっています。

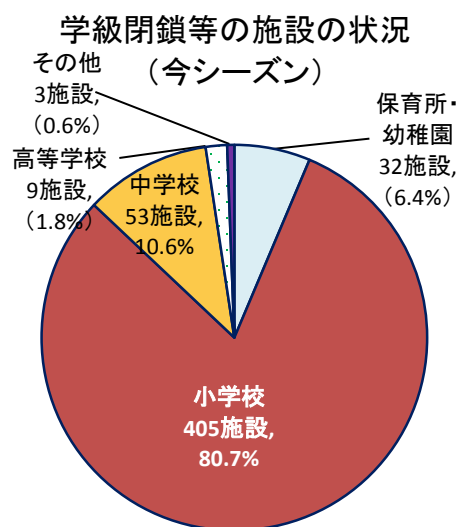
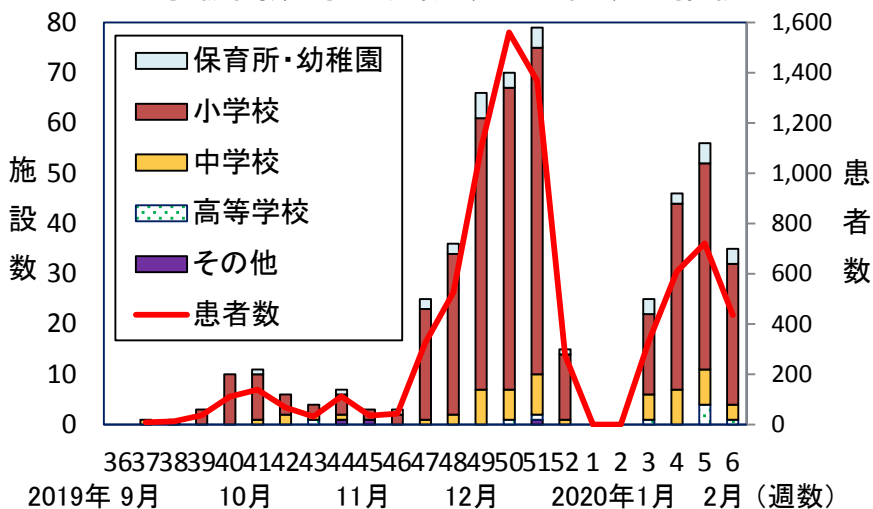
年齢層別患者割合



4 市内学級閉鎖等状況:第6週は、35件の報告(保育所・幼稚園3件、小学校28件、中学校3件、高等学校1件)があり、報告された患者数は436人でした。年明け以降、増加し続けてきた市内学級閉鎖等の報告は、第6週にて減少に転じました。

今シーズンの累計では、第6週までに502^{*2}件の報告があり、報告された患者数は延べ7,863^{*2}人となっています。報告された施設の割合は、保育所・幼稚園6.4%、小学校80.7%、中学校10.6%、高等学校1.8%、その他0.6%となっています。

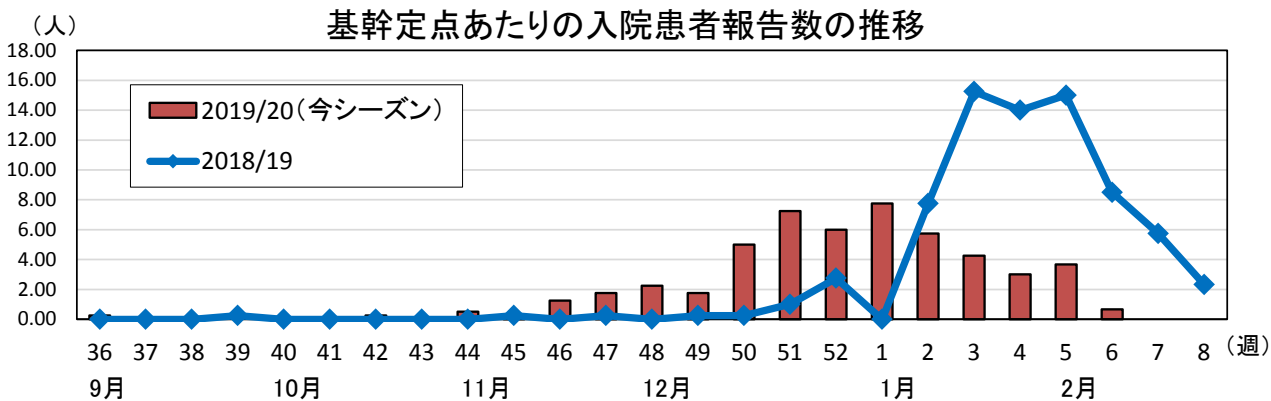
学級閉鎖等の施設数と患者数の推移



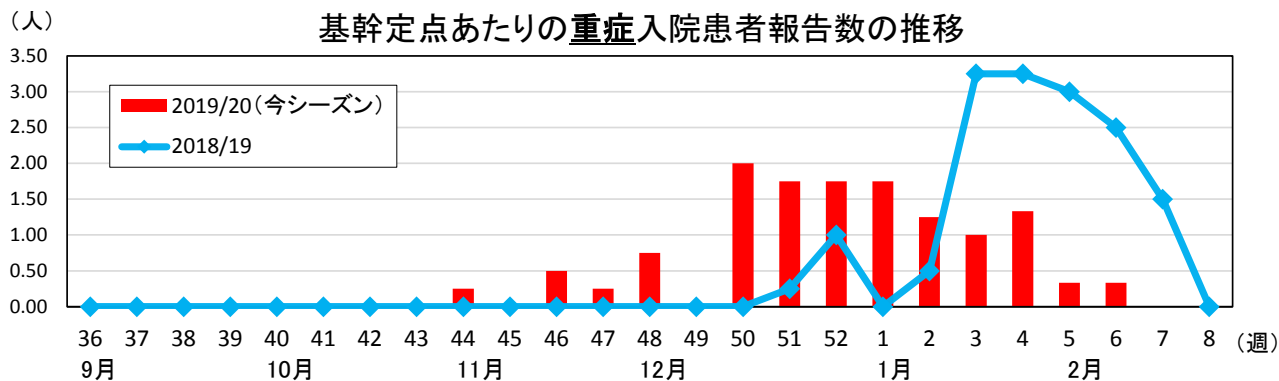
5 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※7}における定点あたりのインフルエンザ入院患者は、第6週で0.67人となっており、前週より減少しています。

今シーズンの現在までの年齢別報告は、5歳未満が27.6%、5歳以上10歳未満が18.1%、10歳代が4.5%、20歳代が2.0%、30歳代が0.5%、40歳代が3.5%、50歳代が3.0%、60歳代が6.5%、70歳代が18.1%、80歳以上が16.1%となっています。

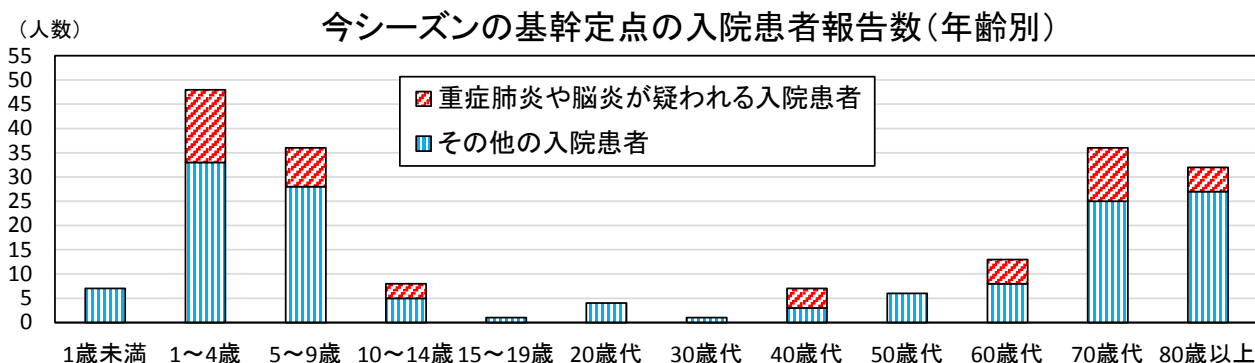
※7 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。



入院時の診療内容が把握されている事例で、ICU入室、人工呼吸器の使用、頭部CT検査、脳波検査等が実施された重症肺炎や脳炎が疑われる入院患者は、第6週に1人の報告がありました。重症肺炎や脳炎が疑われる入院患者が、今シーズンは現在までに累計51人が報告されています。



今シーズンの重症肺炎や脳炎が疑われる入院患者の年齢の分布は、5歳未満15人、5歳以上10歳未満8人、10歳以上15歳未満3人、40歳代4人、60歳代5人、70歳代11人、80歳以上5人となっており、小児と高齢者で多く報告されています。



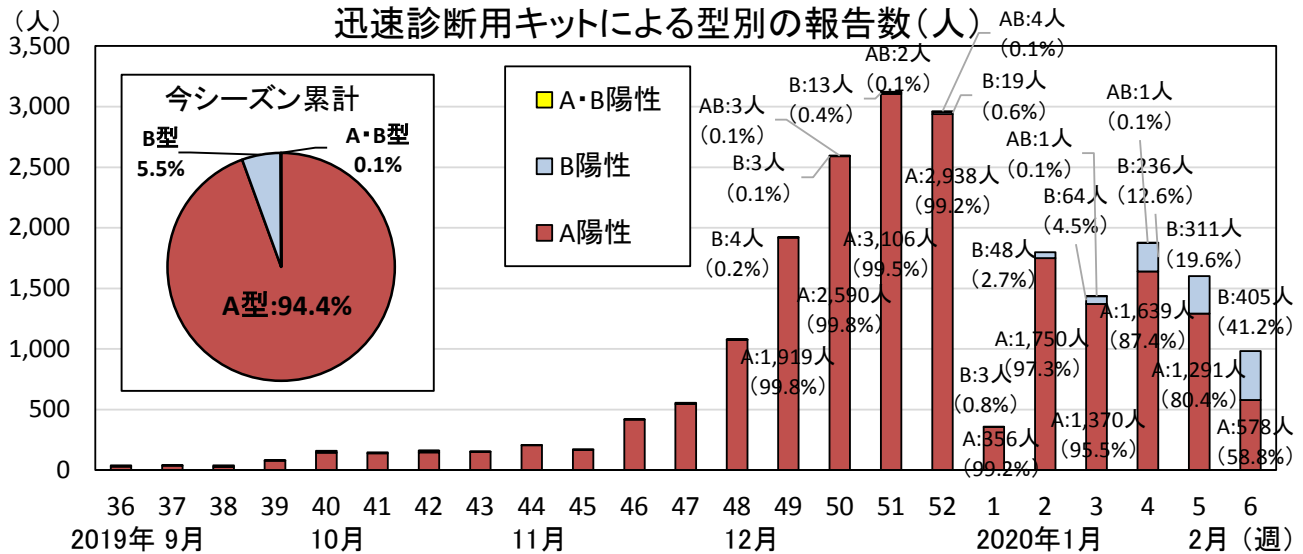
6 インフルエンザ脳症:市内における急性脳炎の発生届のうち、病原体がインフルエンザと疑われる報告は、前号から2月12日までの間はありませんでした。

今シーズンの市内の報告は9人(10歳未満6人、10歳代3人)となっています。

7 迅速キット結果:第6週の迅速キットの結果は、A型58.8%、B型41.2%でした。これまでA型がほとんどを占めて推移してきましたが、第2週以降、B型の報告が増加傾向となり、第6週では半数近くを占めています。例年、流行の後半にてB型の占める割合が増える傾向にあります。

今シーズン累計では、A型94.4%、B型5.5%、A・B型ともに陽性0.1%となっています。

横浜市の患者定点医療機関における
迅速診断用キットによる型別の報告数(人)



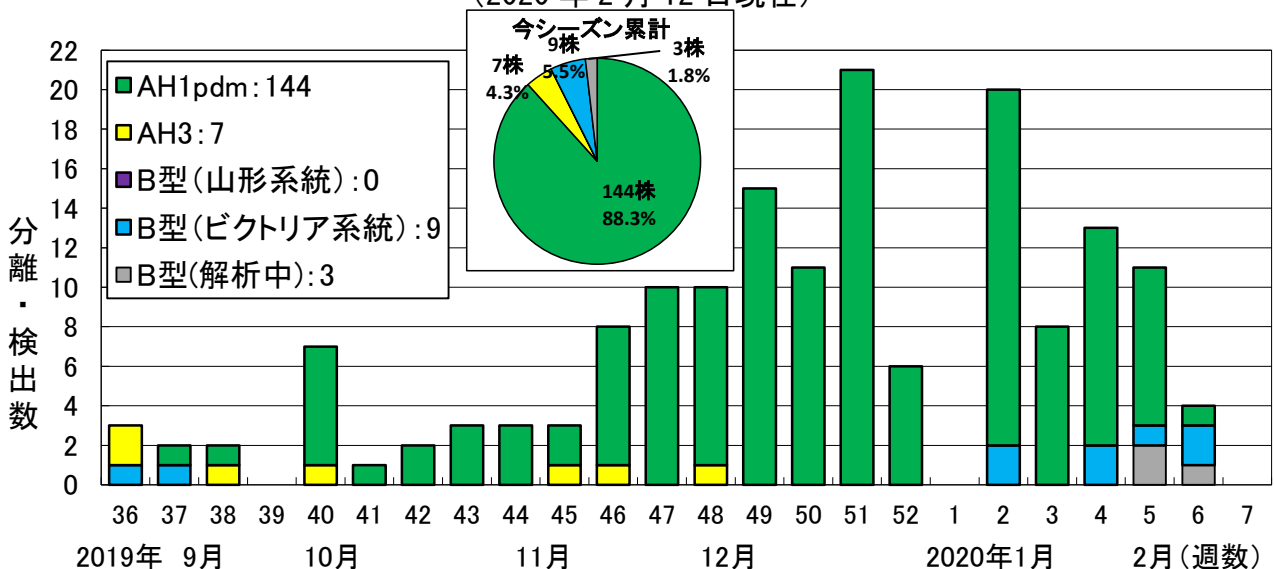
8 市内病原体検出状況:市内では病原体定点^{※8}からAH1pdm(144株)、AH3(7株)、B型(ビクトリア系統)(9株)、B型(解析中)(3株)が分離・検出されており、全国と同様の傾向と考えられます^{※9}。

※8 病原体定点:採取した検体を衛生研究所に送付する医療機関で、市内に17か所あります。うち、インフルエンザについては12か所にて採取されています。

※9 [インフルエンザウイルス分離・検出速報\(国立感染症研究所\)](#)

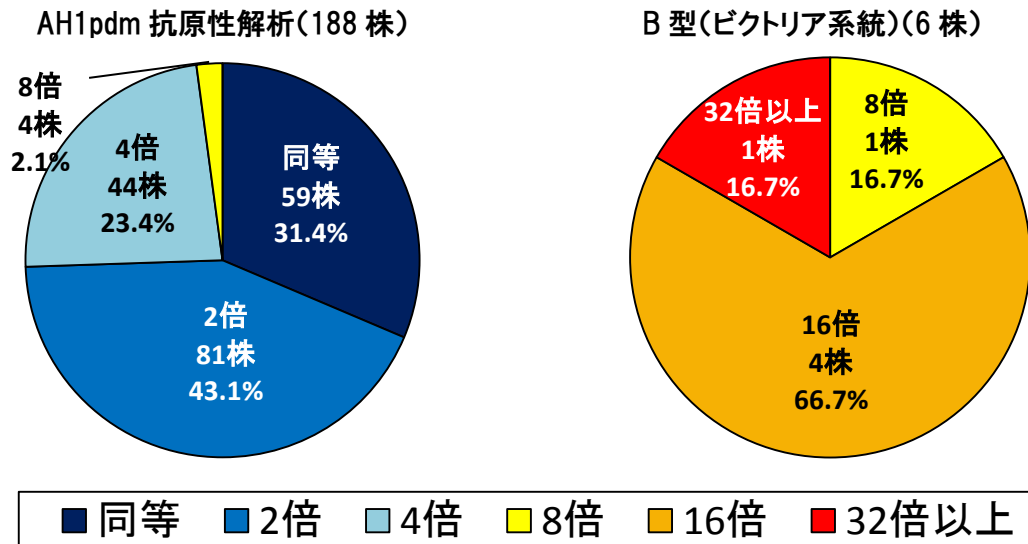
市内病原体定点からのインフルエンザウイルス分離・検出状況

(2020年2月12日現在)

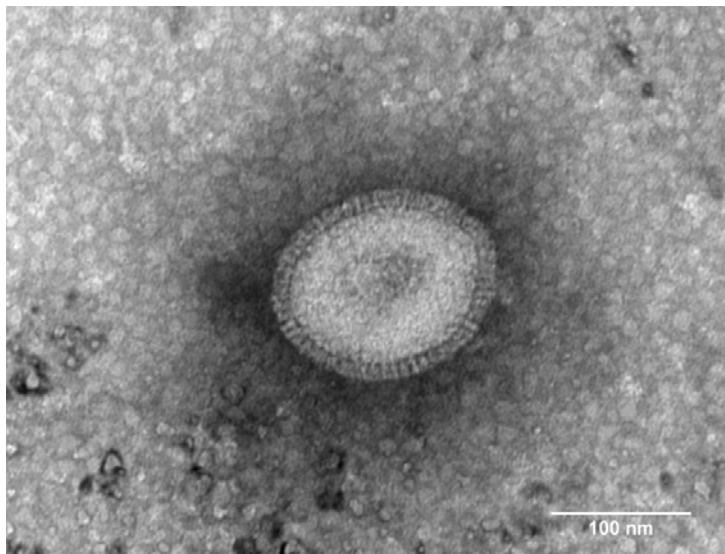


9 分離株の抗原性解析:市内で分離された株(細胞培養した 194 株、2 月 12 日現在)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)を実施しました。ワクチン類似とされているのは 4 倍以内です。あくまでもウサギの血清を使っているため参考値ですが、現在のところ、AH1pdm(188 株)は 97.9%が 4 倍以内、2.1%が 8 倍でした。B 型(ビクトリア系統)(6 株)は 8 倍が 1 株、16 倍が 4 株、32 倍以上が 1 株となっています。

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析(ウサギ免疫血清)



インフルエンザウイルスの電子顕微鏡写真(6 万倍)



撮影:
横浜市衛生研究所

今後は報告数や型の検出状況に応じて、不定期で発行いたします。毎週の流行状況は[横浜市感染症情報センターホームページ](#)に掲載している「最新の感染症発生状況(横浜市内)」の「週報」の「定点情報」をご参照ください。

【参考リンク】 近隣自治体の流行状況 ○[神奈川県](#) ○[川崎市](#) ○[東京都](#)
全国の流行状況 ○[国立感染症研究所](#)

【お問い合わせ先】 横浜市衛生研究所感染症・疫学情報課 TEL 045 (370) 9237
横浜市健康福祉局健康安全課 TEL 045 (671) 2445